

音声読み上げ用テキストデータ

東京都現代美術館 MOT サテライト 2019 ひろがる地図

企画展示室地下2階に入ってすぐの部屋に、ごあいさつパネルと展示室全体の地図があります。そこから左に進み、時計回りに八つの展示室を通して、この場所に帰ってきます。また、美術館の外にも7箇所のMOTスポットという展示スポットがあります。MOTというのは、東京都現代美術館の愛称です。

美術館の利用に障害のある方のお問い合わせ先は

電話 03-5245-4111 (代表)

メール mot-satellite@mot-art.jp

担当者不在の際には、折り返しご連絡をさせていただきます。

以下は、それぞれの展示室の入口に掲げられている解説パネルのテキストデータです。

ごあいさつ

美術館と地域がつながり、まちの魅力を掘り起こすプロジェクトとして休館中の2017年に始まったシリーズ「MOT サテライト」は、おかげさまで4回目となりました。今回はリニューアルオープンした美術館をメイン会場とした展示に加え、清澄白河のまちの中に点在するMOTスポットでの展示、そして「冒険の書」を片手にまちを遊歩する作品のご紹介によって、美術館のあるまちを自由に楽しんでいただくことを狙いとしています。

展示のテーマは「地図」です。目的地に最短距離で行くためだけではない、様々な地図をここでご紹介します。知らない土地と出会う手がかりでもあり、世界をいかに認識しているかの視点を映し出す鏡でもある「地図」は、この美術館のあるまち、そしてあなたの住むまちへのまなざしも変えるでしょう。

展覧会の開催にあたり、様々な面でご協力を賜りました作家ならびに関係するすべての皆様に、心から御礼申し上げます。

主催者

最初の展示室

タイトル：空想地図

なんとなく見慣れたフォーマットの市街地地図。そこそこ大きい都市のようですが、どこの地図でしょうか？

これは首都である西京市から南に30キロ離れた内陸部にある、人口156万人の都市、なごむる市の地図です。つまり、日本ではない架空の土地の地図なのです。地図に描かれている地名も鉄道会社名も、スーパーマーケットやコンビニの名称やロゴも、すべて架空です。

作者である今和泉隆行は、創造主として理想の街を具現化したいわけではありません。なごむる市に

暮らす様々な人達の日常や葛藤やせめぎあいを想定した上で、それを客観的に記述する方法として地図を描いているといいます。そう、このなごむる市には、私たちの暮らす土地と同じように、様々な人が暮らしているのです。

不動産屋の間取り図や自治体指定のゴミ袋も、なごむる市のものです。美術館の外にある MOT スポット 3箇所にも、中村市関連の作品が展示されていますので、ぜひ探しにしてみてください。

作家紹介：今和泉隆行（地理人）

1985年生まれ。7歳の頃から空想地図を描き、現在も空想地図作家として活動を続ける。47都道府県300都市を回って全国の土地勘をつけ、地図を通じて人の営みを読み解き、新たな街の見方を模索している。都市や地図に関する記事執筆、テレビ番組・ゲーム・絵本の中の地理監修・地図制作にも携わる。

2つ目の展示室（天井が吹き抜けの大きい部屋）

タイトル：アイデンティティ・タペストリー

この展示室の作品は、参加者によって少しずつ作られていく作品です。赤ちゃんのゆりかごのような入れ物の中には、作家が一本一本異なる色に染め上げた毛糸が入っています。参加する人はその一つを手にとって、まずは自分に関わる土地、そして自分があてはまると思う文に糸をかけていきます。その集積がこの展示室を歩きかう様々な人々が織りなすタペストリーとなるのです。

マリー・コリー・マーチは今回、入念なリサーチと対話を基に、日本に暮らす人たちに問いかける言葉を選び出しました。様々なアイデンティティを表す文には、向き合うのが辛いものや、自分とは相容れないと思うものもあるでしょう。しかし、そのすべてを包摂しコミュニティが成り立っていることを示しています。

制作に参加できる人数には限りがありますが、自分だったらどこに糸をかけるか目で追いながら、自分や自分のまわりのコミュニティに向き合う時間をゆっくりと過ごしてください。

作家紹介：マリー・コリー・マーチ

1977年生まれ、カリフォルニア在住。布や糸など様々な素材を使った参加型インスタレーションやパフォーマンスを行なうアーティスト。オレンジカウンティ現代美術館センター、キルトとテキスタイル美術館（サン・ホセ）、マージョリー・バリック美術館などで展示を行っている。

3つ目の展示室（少し明るさを抑え、真ん中に休憩用のソファのある部屋）

タイトル：まちを歩く

まちを歩くとき、あなたは何を知覚しながら歩いていますか？目印だけを見て歩くこともあれば、お店からの美味しそうな匂いや、人々の楽しげな話し声を感じることもあるでしょう。

この展示室に並んでいるのは、音や匂い、触覚や身体感覚など、視覚以外の感覚によって空間を認識しているアーティスト、光島貴之の作品です。端からずっと目で追っていくと、テープやシートの色や形、または木製パネルに打った釘の間隔や傾きなどによって、歩いた軌跡が表現されたロードマップになっ

ていることに気がつきます。

一般的な地図は、公平で偏りのない客観的なものとして編集されています。しかし私たちがまちを歩いて認識できるのは、こうして自分が実際に歩いて感じ取ったことだけです。その積み重ねによって、まちのイメージをつかめるようになるのです。

光島がこの清澄白河のまちを歩いて制作した新作は、美術館の外にある MOT スポットにも展示されていますので、お楽しみに。

作家紹介：光島貴之

1954 年生まれ、京都府在住。10 歳の頃に失明し、現在は鍼灸師としても活動。1995 年より製図用テープとカッティングシートを用いる独自のスタイルで「触る絵画」の制作を始める。兵庫県立美術館やサンディエゴ美術館など国内外での展覧会・個展が多数。

4 つ目の展示室（暗く、真ん中に布の作品がテーブルクロスのように置かれている部屋）

タイトル：民族学資料と古地図

平面的な位置関係を正しく示すだけが地図ではありません。インターネット上でルート検索する際の地図ばかりを見慣れた眼にはちょっと意外な「地図」を、いくつかご紹介いたします。

太平洋上ミクロネシアに位置するマーシャル諸島に暮らす人々は、ヤシの葉の葉柄と貝殻を組み合わせた「スティック・チャート」と呼ばれる海図を使っていました。貝は島の位置を、棒は海流やうねりをあらわしています。

オーストラリア先住民は、創世神話「ドリーミング」を語りながら砂絵を描く儀礼の伝統を持っています。現在はアクリル画に置き換えられてはいますが、そのモチーフは神話に登場する精霊や祖先たちの旅の軌跡を描いたものが多くあります。

展示室中央に置かれた布は、アフリカのカメルーンのバミレケの人々が使っているものです。この模様は王宮内の建物の配置が様式化したものと言われています。

また、ヨーロッパの古地図 3 点は、どれも日本が描かれています。正確な測量に基づくものではありません。すでに描かれた地図や口伝えの情報をもとに編集した結果、ちょっとおかしなことになっている、試行錯誤の跡が見えます。

5 つ目の展示室（暗幕で入口をふさいだ暗い部屋）

6 つ目の展示室（少し明るさを抑えた、白い大きなテーブルのある部屋）

タイトル：東京都現代美術館コレクションから

当館のコレクションの中にも、面白い「地図」があります。

荒木珠奈の《Caos poetico—詩的な混沌—》は、縦横無尽にからまった電線が小さな家の各戸に明かりを灯している作品です。作家がメキシコシティで見た、貧しい人々が勝手に電線を引いている光景を作品化したものですが、道路ではなく電線から見れば、それぞれの家のつながりはこんな「地図」で表現されるのかもしれませんが。

中央に緑色の四角が描かれた絵が 12 点並ぶ《トーキョー・ダイアグラム H'6》は、柳幸典の作品です。

平成6年の時点での、東京の地下鉄の路線図を並べたものです。(清澄白河の駅がまだありません。)各路線が東京の真ん中に向かっていているのに、皇居を絶妙に避けて中央がヴォイドになっている様子を描いています。

白いテーブルの上に小さなガラス瓶が並んでいるのは、栗田宏一の《ソイル・ライブラリーJAPAN》です。日本全国365箇所て採集した土が、一つ一つ地名ラベルのついた瓶に収められています。46億年前に地球が生まれてからの環境、気候、地理的条件、生物などによって、土地ごとに異なる色を見せる土の美しさに心を奪われます。

ナイジェル・ホールの《無名の土地への入口》は、金属の棒を組み合わせた彫刻作品です。名前のない土地とはどこなのでしょう。どこかでこの彫刻作品を辿るように歩いてみたら、その不思議な土地への魔法の扉が開くのではないのでしょうか。

7つ目の展示室（ワークテーブルと大きな地図のある部屋）

タイトル：日常記憶地図

この展示室に並んでいるのは、美術館周辺エリアに住んでいた／住んでいる人に、当時の地図の上に生活圏をプロットしてもらいながらインタビューした、この土地についての話です。一人ずつの地図のまわりに、土地にまつわる個人的なエピソードをちりばめています。

現在は「コーヒーの街」とも言われる清澄白河ですが、賑やかで粋な深川の文化（当館に隣接する木場公園には広大な貯木場があり、材木商が立ち並ぶエリアでした）や寺町としての静かなたたずまいなど、この土地の変遷や変わらないものなどが見えてきます。深川・清澄白河を主人公とした物語を、10人の語り手がつむぐアンソロジーといえるでしょう。

サトウアヤコの「日常記憶地図」というメソッドは、反復して訪れる場所が日常や愛着を構成するという考えに基づいています。そして地図を描きながら日常を語ることで、普段は意識することのない「弱い記憶」を呼び起こします。そうして土地と自分との関係性や、自分の世界の範囲などを確認する作業なのです。

作家紹介：サトウアヤコ

建築・情報工学を学び、対話を主としたリサーチやコンセプトデザインなどを行う。2010年から「mogu book」、「本棚旅行」、「カード・ダイアログ」など複数のプロジェクトを継続しながら、媒介的なコミュニケーションや言語化のプロセスについて探求している。

8つ目の展示室（薄暗く、壁にたくさんの文字が描かれている部屋）

タイトル：演劇クエスト

選択肢によってストーリーが分岐するゲームブックを手がかりに、ひとりひとりがまちを遊歩する《演劇クエスト》。壁に散りばめられた言葉を読んで『冒険の書』を手にしたら、物語が始まります。

清澄白河、門前仲町、木場・・・さらにはもっと遠くまで歩き回り、現実の東京のまちに残る歴史の痕跡や風景に触れながら、架空のメトロポリスの物語を読み進めていきます。

タイトルに「演劇」とついていますが、プロの俳優が待ち受けているわけではありませんし、ドラマチックなことが起こるとは限りません。しかし参加者が能動的に現実の風景に目を凝らし、想像力を働かせることで、フィクションと現実が交差し、普段と変わらないまちの見え方がガラリと変わる、そんな瞬間が訪れるはずですよ。

作家紹介：

藤原ちから(orangcosong)

アーティスト／批評家。1977年高知市生まれ。横浜を拠点としつつ、アジアを中心に世界各地を旅しながら活動している。2017年度よりセゾン文化財団シニア・フェロー、文化庁東アジア文化交流使。

住吉山実里(orangcosong)

アーティスト／ダンサー。1986年大阪生まれ。身体と空間をつなぎたいと、ダンスと建築を学ぶ。2010年より自身の作品創作をはじめ、近年は完全無言、筆談のみで対話を試みる『筆談会』をアジア各地で開催。

進士 遙

イラストレーター。1984年生まれ。18歳までソウル、上海で過ごし、ロンドンのロイヤルカレッジ・オブ・アートで学ぶ。「リサーチ×妄想×イラストレーション」をテーマにアートプロジェクトや地域振興活動などの視覚化に携わる。